

## はじめに

この「地域研究シリーズ」では、第11巻である本書と第12巻を、「アフリカ」にあてている。この2巻は何を規準に分けてあるかを最初に説明しておきたい。

「シリーズ」で一つの地域を2分冊でとり上げているのは、他に中国、東南アジア、南アジア、中東があるが、これらはみな「経済」と「政治・社会」との2領域に分ける構成をとっている。しかしアフリカの場合は、このような分けかたをしなかった。アフリカの地域研究には他の地域に類のないほど、いわゆる学問分野で分けない方がよい事情が存在する。この事情については、総論の第1章で説明するが、本「シリーズ」では、アフリカ研究の2分冊を、ミクロの主題とマクロの主題という切りかたで編集することにした。

ミクロの主題という場合、ここで意味しているのは、問題対象地域の範囲を小さく限って観察しないと見えにくい問題、換言すれば社会の基本的な構造が、小さな対象に普遍的に表われているが、視野を限って、研究者が対象により近く、深く接しないと、その特徴を把握することができないという種類の主題である。いわば地域研究のレーゾン・デートルを示すような主題がここに入るといってもよいが、このようなミクロの主題を本書(『アフリカI』)でとり上げることとする。第12巻(『アフリカII』)の方は、これに対してマクロの主題をとり上げる。マクロの主題とは、分析枠をより広くし、いわば広角レンズでとらえた対象のような性質をもつ主題である。この後者は、政治経済構造という言葉を使って表わすものと似ているが、ここでは通常社会学で扱う問題、例えば官僚制なども含むるので、あくまでミクロとマクロという言葉で、この分けかたを説明したい。

他の巻と同様に、本書も「総論」である第I部と、関係論文を収録した「ア

フリカ論」の第II部から成り立っている。総論では、アフリカ研究が、「地域研究」全体のなかで、どのような意味合いをもっているかを、努めて説明しようとした。したがって、日本におけるアフリカ研究の流れの包括的な説明とか、アジア経済研究所のアフリカ研究の時期的区分に従った説明などはしていない。むしろ現代のアフリカに関する問題群の性質について、編者個人の考えが多く提示されている。

アフリカ研究の課題を将来にわたって展望するため、アジア経済研究所の研究成果から八つの問題群を設定したが、本書では、そのうちのミクロの主題と考えられる(1)部族とナショナリズムの関係、(2)土地保有制度の特質、(3)小農的生産構造と市場経済、の三つの主題について検討する。第II部ではこの三つの主題に属する11の論文を収録したが、紙面の制約から、その一部を割愛して収録せざるをえなかったことをことわっておきたい。

最後に「総論」の部分について、原稿にコメントを下された山口博一、佐藤宏、林晃史の各氏に対し、また再録を許して下さった論文執筆者の各氏に対し、感謝の意を表したい。